

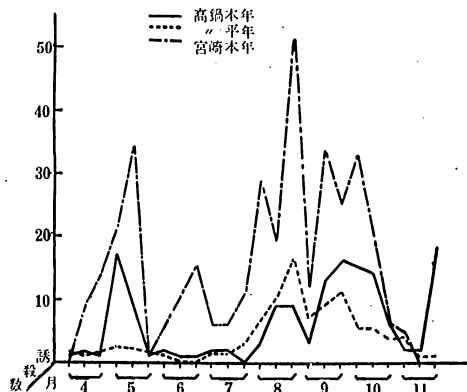
ミナミアオカメムシの生態と防除について (予報)

鮫島 徳造*・永井 清文*

SAMESHIMA, T. and NAGAI, K. On the Bionomics and Control of *Nezara viridula* L. (Preliminary report)

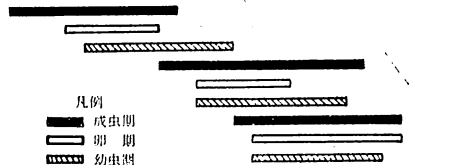
早期稲或は新作物の導入など作付体系の変動により病害虫の発生相にはかなりの変化が起つており、ミナミアオカメムシもその1例であつて、かつて経験しなかつた害虫のため現在宮崎県ではその対策になやまされている。よつてすみやかにこれが解決策をみいだすために研究に着手したのでその概要を述べて参考に供

第1図 ミナミアオカメムシの予察灯による誘殺状況

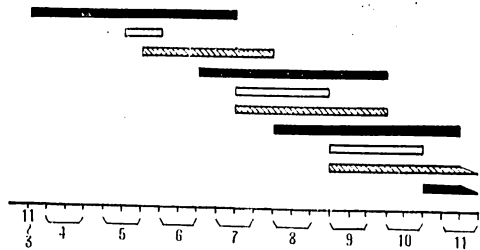


* 宮崎県農業試験場

第2図 両種の年間世代経過表
Nezara viridula L.



Nezara antennata Sc.



する。

発生経過

成虫は 60 w 予察灯に誘致さるのでその最近の消れ長を示せば第1図のとおりである。

即ち、概ね4回の発生の山があるが、年により晩秋更に1回最後の飛来期があるようである。大部分の虫が成虫態で越冬し翌春4月上旬より活動を始める。比較のため同時に飼育した本種と形態の類似したアオクサカメムシ *Nezara antennata* Scott の活動開始は4月下旬であり、産卵開始も前者が早く4月下旬であるが、後者は5月中下旬からである。両種をこの時期から馬鈴薯、菜種、大豆、稲などを飼料に供して系統飼育

して比較を行つた結果は第2図に示すとおりである。即ち、ミナミアオカメムシは年4世代、アオクサカメムシは3世代を経過することがわかつた。なお又前者は後者に比べて産卵数なども多く繁殖能力のはるかに高いことが窺はれる。稲への被害は越冬後の次世代成虫が穂朶期の早期水稻へ先づ飛来し、晩秋まで影響をうける。

防除方法

1~2の薬剤に有効なものも認められるが、散布技術について今後十分研究の必要があるものと思われる。